

# Art and Society

The Work of Art Front Gallery

—アートフロントギャラリーの仕事—  
**社会と美術**



ART FRONT GALLERY

私たちの会社は、一枚の版画を売ることから出発しました。  
お金を払って作品を所有してもらおうということは、同時代的共犯性をもつということでもあります。

暮らしの中に美術を！

私たちは、美術を展開する場を求め、工事現場を見かけると御用聞きに行くようになりました。

そこから、住宅やオフィス、ショップ、ホテル、病院などインテリア空間にあわせて総合的にコーディネートする仕事に携わるようになり、都市計画にも関わるようになっていきました。

さらに、過疎高齢化の進む中山間地や離島など、全国のさまざまな地域の人々と協働する現場をもつようになり、今に至ります。

美術は、日常的な社会の実相、時代精神を映すとともに、未来への予感をあらわしています。

美術を通して、私たちは世界のあらゆる地域を理解することができる、美術を通してかすかに発せられる人間の意思を知ることができる——それが私たちの信念です。

美術を深く社会的な場で展開し、多くの人々と協働することを願って、これまでのアートフロントギャラリーの試行をご紹介させていただきます。

## 世界とつながる

Connecting with the World .....04

## 都市の中の美術

Art in the City .....10

## 地域をひらく美術

Art Opening Communities .....16

## 社会の中の美術

Art in Society .....20

## 子どもたちへ

For Children .....24

## 協働する美術

Collaborative Art .....27

## 拡張する美術

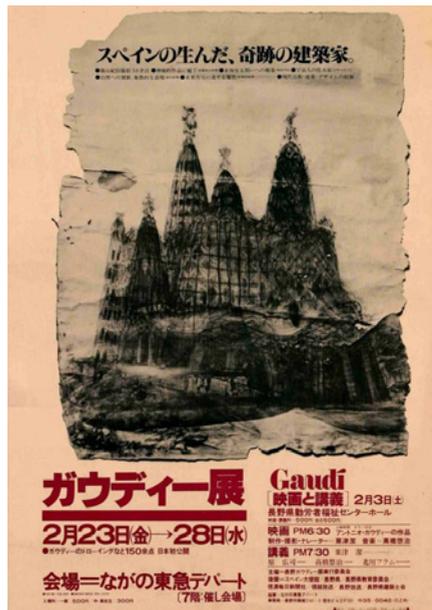
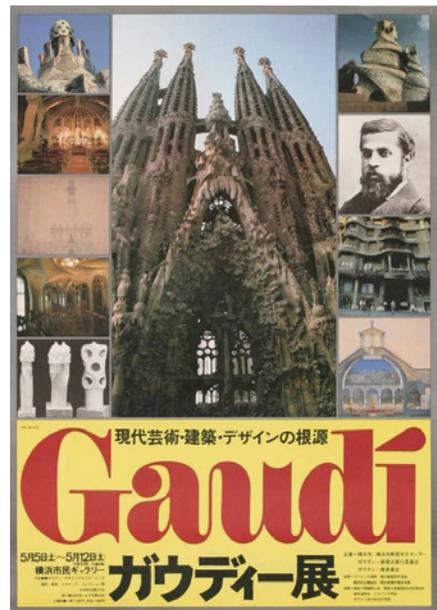
Expanding Art .....28

## ガウディー展 | 1977~1978

バルセロナのサグラダ・ファミリア聖堂の建築家として知られるアントニ・ガウディ。しかし、今から50年前の日本ではほとんど知られていませんでした。「ガウディー展」は、『ガウディ全作品』（粟津潔、磯崎新、中山公男、六耀社、1977）の出版に合わせ、粟津潔氏より相談を受け実現した展覧会です。カテドラ・ガウディが所有するオリジナルドローイングや図面、模型、家具、写真（撮影：篠山紀信）など約270点からなる日本では初めてとなる本格的なガウディ展は、東京を皮切りに全国13か所で開催され、7万人が来場。講演会や映画会等も30か所で開催されました。カタルーニャという地域に深く根差したガウディにない、展覧会は各地のさまざまな人々に担われ、その風土や文化を照らし出しながら開催

され、日本でのガウディ・ブームの端緒を開くものとなりました。

その後、アートフロントギャラリーはバルセロナのアーティストや画廊、版元、家具会社、出版社など深いつながりをもつようになっていきます。



## アパルトヘイト否! 国際美術展 | 1988~1990

南アフリカの人種隔離政策・アパルトヘイトに反対する美術展がユネスコを中心に組織され、世界34カ国81人のアーティストが参加、1983年パリでの第1回展以来、世界12の国と地域で開催されました。この展覧会の日本開催の窓口となり、2年間で全国194か所を巡回、38万人を動員したのが「アパルトヘイト否! 国際美術展」です。

できるだけ多くの人、特に子どもたちに見てもらうために、1日1か所での展覧会の開催を可能とする美術収蔵庫付き大型トラック「ゆりあ・べむべる号」を制作。沖縄を皮切りに各地で草の根の実行委員会が設立され、展覧会は引き継がれていきました。国会でも開催され、オープニングには首相以下、各党党首が出席、全国で展覧会に関わった1000人が参加しました。獄中のネルソン・マンデラ氏からメッセージも寄せられ、日本の対南ア政策に影響を与えました。

展覧会はその後、「ゆりあ・べむべる号」に運ばれて玄界灘を渡り、国連加盟前の韓国・ソウルでも開催されました。アパルトヘイト廃止後、作品は南アの国会議事堂で展示、その後、西ケープのマイブイエセンターに収蔵されています。ガウディ展、アパノン展で生まれた「世界」「地域」へのまなざしは、その後のアートフロントギャラリーの活動を貫く視点となっていきます。

実行委員：粟津潔、内山尚三、大岡信、大沼保昭、加藤周一、楠原彰、立松和平、土本典昭、勅使河原宏、中山公男、野間宏、原広司、針生一郎、武者小路公秀、山口昌男



ゆりあ・べむべる号



展示風景

## 世界人権宣言50周年記念 川崎市文化事業 「いのちの響き〜アートのお祭り」|1998

韓国・朝鮮の芸術文化の紹介を通して国際交流を図り、人権の意味を問う川崎市の文化事業の一環で、韓国の民衆運動に深い関心を寄せ、日本と韓国の関係に向き合ってきた富山妙子氏の展覧会を手伝いました。また、仏教美術における朝鮮の影響や朝鮮の美術品略奪問題等をテーマに、かわさき市民アカデミー連続講座において「東アジアの芸

術文化を考える」を企画、番外編としてシンポジウム「革命の芸術が減じた時代に芸術家は何を考えるか」を開催しました。

連続講座講師：水野敬三郎（仏教美術史）、南永昌（朝鮮美術品略奪問題）他

シンポジウム登壇者：富山妙子、高橋悠治、島田雅彦、太田昌国、北川フラム

## 大地の芸術祭から オーストラリア・ハウスへ|2000~

オーストラリアとは、第1回大地の芸術祭で「オーストラリア・ナイト」を大使館と共催して以来、深く多様な関係を築いてきました。各芸術祭へのオーストラリア作家の参加の他、アボリジニ現代美術展（2003年「精霊たちのふるさと」、2016-17年「ワンロード」）を全国で開催。2009年にはオーストラリア政府の全面的支援により、制作・滞在・交流拠点として、空家を改装した「オーストラリア・ハウス」が越後妻有に誕生します。しかし2011年3月12日の地震により全壊。2代目「オーストラリア・ハウス」が、国際コンペ（審査委員長：安藤忠雄）により選ばれた建築家アンド

リュー・バーンズの設計により2012年に設立されました。また姉妹会社の現代企画室から『オーストラリア現代文学傑作選』全8巻が刊行されています。



フィオナ・フォーリー「連磨の目」(大地の芸術祭2000) photo ANZAI



アボリジニ現代美術展「精霊たちのふるさと」(大地の芸術祭2003) オーストラリア・ハウス photo Osamu Nakamura

## 日本・ヨーロッパ建築の新潮流展|2001,2002 ヨーロッパ・アジア・パシフィック建築の新潮流|2004~2011

2000年紀最初の10年が「日欧協力の10年」と提唱されたのを機に、日欧の優れた若手建築家を紹介、その思想と経験を分かち合う展覧会とシンポジウムを開催したいという在日EU加盟15カ国大使館の要請を受け、私たちはその事務局を担いました。展覧会は、日欧から選ばれたコミッショナーがそれぞれ日本とEU各国から出展建築家を選び、東京と欧州文化首都を巡回、各地で大きな反響を呼びました。EUが25か国に拡大された第3回展からは「ヨーロッパ・アジア・パシフィック建築の新潮流」として隔年開催となり、第5回展まで日欧、韓国、香港、オーストラリア17都市で開催されました。このプロジェクトを機に、ヨーロッパ大使館との縁が生まれました。

コミッショナー：アルバロ・シザ、ヴィール・アレツ、アレハンドロ・ザエラ=ポロ、ヤン・ファン・レーテ、ドミニク・ペロー、ウィニー・マース(MVRDV)、ピーター・クック、横文彦、原広司、伊東豊雄、山本理顕



東京展オープニング、2002 (ヒルサイドプラザ)



東京展展示風景、2004 (ヒルサイドフォーラム)

## 日本におけるドイツ年2005/2006 ドイツ・デザイン・プロジェクト・イン・ヒルサイドテラス|2005~2006

「日本におけるドイツ2005/2006」はリアルタイムのドイツを様々な角度から紹介し、日本とドイツの新たなネットワーク構築を目的としたドイツ政府による国家事業。その一環としてドイツ最先端のデザインをめぐるイベント、展覧会がヒルサイドテラスで一年にわたって開催されました。日用品からファッション、インテリア、自動車、広告からライフスタイルまで、ドイツのデザイン戦略を探る「ドイツ・デザイン・ラボ」(全10回)では毎回第一線のデザイナー、専門家をドイツから招き、日本の専門家、企業との活発な

議論が行われました。私たちにとって一年にわたりひとつの国と関わり続ける初めての経験でした。



展示風景 (ヒルサイドプラザ)

## 東大寺アートプロジェクト：実忠の三つの不思議な花 | 2004

「実忠の3つの不思議な花」は、東大寺二月堂の修二会（お水取り）を創始した僧・実忠にまつわる伝承を題材にしたレバノンの建築家・アーティスト、ナディム・カラムによるアートプロジェクトです。東大寺の歴史的空間を舞台に、光・音・映像・造形を融合させた作品群が展開されました。9.11後、大国による中東への攻撃が続く中、平和への祈りをこめ、私たちはプロジェクトを実現すべく実行委員会を組織し、鏡池に設置された彫刻を販売するなど資金調達も担いました。会期中にはシンポジウム「文明の交流－仏教、キリスト教、イスラム教をめぐって」も開催しました。

主催：東大寺アートプロジェクト実行委員会  
共催：東大寺



ナディム・カラム「東大寺アートプロジェクト：実忠の三つの不思議な花」

## 東アジア文化都市2016奈良市「<sup>ことほぐなら</sup>古都祝奈良」 | 2016

「東アジア文化都市」とは、日本・中国・韓国の3か国が毎年それぞれ1都市ずつ選び、各都市が行うさまざまな文化プログラムを通して、交流を深める国家プロジェクトです。2016年の東アジア文化都市に選ばれた奈良市では、「古都奈良から多様性のアジアへ」をテーマに美術、舞台芸術、食などの

文化プログラムが展開され、私たちはその基幹事業「古都祝奈良－時空を超えたアート祭典」の美術部門をディレクションし、記念シンポジウム「移動と文化－黒潮文化圏としての東アジアから未来を展望する」を企画しました。



サハンド・ヘサミヤン「開花」興福寺 photo Keizo Kioku



キム・スー ज्या「演繹的なもの／息をつくために一国旗」元興寺 photo Keizo Kioku

## 瀬戸内アジアフォーラム | 2016~

「瀬戸内アジアフォーラム」はアジアを中心とした世界各地でアートと文化による地域づくりに取り組む人々やアーティストが集い、経験を分かち合い、交流することを目的に瀬戸内国際芸術祭の一環として2016年にスタートしました。私たちはその企画コーディネートを担い、大地の芸術祭と連動させながら、シンポジウムやディスカッション、作品ツアーを通じてネットワークを形成してきました。変動する世界情勢のなかで、それぞれ異なる環境や背景のもとに活動しているアーティストたちの声を聞くことができる場を醸成しています。

主催：瀬戸内国際芸術祭実行委員会  
共催：福武財団、大地の芸術祭実行委員会



photo Shintaro Miyawaki



アジアフォーラム登壇者ツアー

## 瀬戸内アジアギャラリー | 2025~

瀬戸内国際芸術祭において、アジア各地のアーティストや文化関係者との連携のハブになってきた旧福武ハウスを、名称を新たに再始動。オープニング展では、急速に近代化したアジアで失われつつある手工芸、忘れ去られた人々、社会の目に見えない力学を多様なメディアで可視化する作品を、6ヶ国の作家が展開しました。今後も、小豆島・福田エリアに若手アーティストが滞在しながら、地域資源の活用と地域との協働によって、瀬戸内とアジアを繋ぐ恒常的な拠点施設となることを目指します。



バンクロック・スクラップ「Flora Fauna」



ジャックイ・シプリート「There's no Place」 photo Shintaro Miyawaki

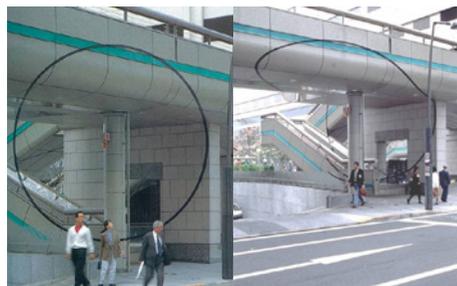
## ファーレ立川アートプロジェクト | 1994

米軍立川基地が1977年に全面返還され、「基地の街」から「文化の街」への転換を図る立川市。住宅・都市整備公団（現UR）は立川駅北口の再開発事業において、アートを導入することを決定、アートフロントギャラリーが指名コンペによって、アートプランナーに選定されました。オフィス、ホテル、デパート、映画館、図書館など11棟のビルが立ち並ぶ5.9ヘクタールの新しい街に、ただアートを置くのではなく、「街に効く」アートとするために、私たちは「世界を映す街」「機能を美術に」「驚きと発見の街」という3つのコンセプトをたて、36か国92人の作家による109点のアートを街全体に展開、「アートの妖精が棲む街」=「ファーレ立川」が1994年10月に誕生しました。パブリックアートの概念を拓いたこのアートプロジェクトは、1995年度の日本都市計画学会設計計画賞受賞をはじめ

都市計画の観点からも国内外で高い評価を受け、アートを通じたまちづくりのモデルとして広く知られるようになりました。1996年、立川市は「まち全体が美術館」構想を策定し、市内各所にパブリックアートを設置。1997年には市民ボランティア団体「ファーレ倶楽部」が結成され、清掃や作品案内ツアー、ワークショップなどの活動を続けています。

2005年には、ファーレ立川街区のビル所有者、立川市、ファーレ倶楽部を中心に「ファーレ立川アート管理委員会」が結成され、作品修復やアートイベントが通年で行われています。2008年からは小学生のファーレ立川での鑑賞授業が始まりました。

「ファーレ立川」オープンから30年以上が経過した今も、アートは街に息づき、立川駅北口一帯は人々が憩い、集う、にぎわいの空間となっています。



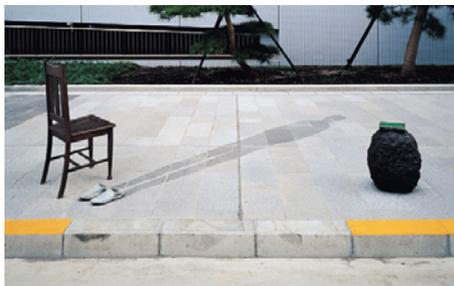
フェリーチェ・ヴァリニ「背中あわせの円」



サンデー・ジャック・アクバン「オブジェ（見知らぬ人）」



ヴィト・アコンチ（車止め+ベンチ）



ホセイン・ヴァラマネシュ「きみはただここにすわっていて。ぼくが見張っていてあげるから」（車止め+ベンチ）



タン・ダ・ウ「最後の買い物」（換気口）



アニッシュ・カプーア「山」



ステイブーン・アントナコス「Tria-3」  
「Tessera-4」photo ANZAI



アートイベント、マルシェを開催



小学生の鑑賞授業



ファーレ倶楽部によるアートガイドツアー



ファーレ倶楽部による清掃活動

## アーバンヴィレッジ代官山

代官山はアートフロントギャラリーの拠点であり、「アートによるまちづくり」の原点でもあります。1984年、建築家・横文彦氏と地元の地主である朝倉家とのコラボレーションによる「ヒルサイドテラス」にギャラリーとして迎えられて以来、私たちは単なる展覧会やイベントの開催にとどまらず、「アーバンヴィレッジ代官山—都市の中の村」という理念のもと、さまざまな形で代官山のまちづくりに関わってきました。

### さよなら同潤会代官山アパート展「再生と記憶」|1997

関東大震災の震災復興住宅として建設された同潤会アパートの再開発にあたり、解体直前のアパートの居室等で13人のアーティストが作品を制作。失われていく時間と人間の営みの記憶を浮き彫りにし、展覧会には5日間で2500人が訪れました。再開発により2000年に誕生した「代官山アドレス」にはパブリックアートが設置されました。

### 代官山インスタレーション|1999~2013

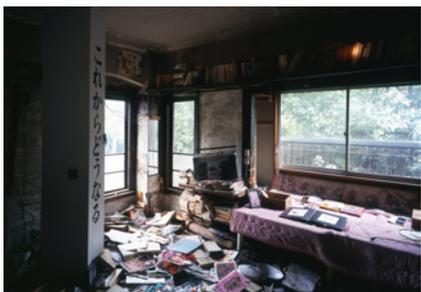
1999年から隔年、計8回にわたって行われた公募展。審査員は横文彦、中原佑介、川俣正各氏がつとめました。場所の特性を活かすことをテーマとしたこのプロジェクトは、作品を探しながら街をめぐることを通して街全体に回遊性をつくりだすとともに、企画の実現のための地元との交渉や調整などを通じて街の連帯感を醸成することに貢献しました。

### アーバンヴィレッジ代官山防災連絡会

代官山では、災害が起こっても、住む人、働く人、訪れた人が助け合って生き延びられる、遠方から訪れた人々が「代官山なら安心だ」と思ってもらえるまちづくりを目指してきました。「代官山アドレス」には防災ベンチが設置され、猿楽祭や防災セミナーが取り組まれています。2026年3月には、住民、商店、企業、行政、学校等をつなぐ連絡会が発足しました。



川俣正「『工事中』再開」2017 (ヒルサイドテラス) photo Gen Inoue



さよなら同潤会代官山アパート展「再生と記憶」  
白井美穂「これからどうなる」photo ANZAI



代官山インスタレーション  
平山俊、渋谷真弘「地下鉄ヒルサイドテラス駅」1999  
photo ANZAI

## 京都駅アート広告|1994

京都駅(原広司設計)の新築に際し、コンコース内14か所に世界のトップアーティストによる企業ビルボードを設置。「広告をアートにする」ことで景観問題を解決しつつ、個別広告を超えた訴求力と国際的な発信を実現し、企業とアーティストの新たな協

働の可能性を切り開く先駆的プロジェクトとなりました。

参加企業：アサヒビール、麒麟ビール、京セラ、オムロン、島津製作所、花園大学他  
事業主：西日本旅客鉄道株式会社／京都駅ビル開発株式会社／株式会社西日本コミュニケーションズ



ロバート・ロンゴ(オムロン)



横尾忠則(アサヒビール)

## 菜の花里美発見展:アートユニバーシアード|2002

千葉県東南部の4つのニュータウン(おゆみ野、ちはら台、あすみが丘、季美の森)。ハード開発が終わり、ソフト面でのコミュニティづくりを課題とした開発者(都市基盤整備公団[現UR]、東急不動産他)の依頼を受け、建築・美術系の22大学38ゼミが、住民と関わりながら、ものをつくり、ワーク

ショップを行う参加型まちづくりプロジェクトを実現しました。また、より多様な分野を織り交ぜるために、いろいろな大学の先生や専門家による40以上の「出前講座」、学生有志による「まちなか劇場」を各所で開催しました。



昭和女子大学杉浦久子ゼミ「蚊帳のウチ」



日本工業大学小川次郎ゼミ+黒田潤三「世界名作住宅アベニュー」

## 大阪・アート・カレイドスコープ | 2007, 2008

第4回、第5回の「大阪・アート・カレイドスコープ」(主催:大阪府立現代美術センター)のプロデューサーに北川フラムが迎えられ、かつて「大大阪」と呼ばれた大阪の魅力を、アートにより蘇らせ、未来

へとつなげようというプロジェクトが行われました。その取り組みは「水都大阪2009」に道を開くこととなりました。



石塚沙矢香「いとほん」photo 高嶋清俊



フェリチェ・ヴァリーニ「Vingt et une droites en spirale」(大阪府庁本館) photo 高嶋清俊

## 水都大阪 | 2009

かつて「東洋のベニス」と謳われた大阪の再生のために大阪府、大阪市、経済界のオール大阪体制で初めて組み合わされたのが「水都大阪2009」です。そのアート部門において、近代化の過程で埋もれてしまった水都・大阪の魅力を再発見し、水の回廊を活かした新しい大阪のイメージを発信し、多様な人々の参加と協働を作り出そうと、中之島公園をメイン会場に、52日間にわたり170組を超えるアーティストが連日、ワークショップやイベントを繰り広げました。学生を中心としたサポーターや多様なNPOや専門家、クリエイターも多数参加。次代の大阪のあり方を議論するシンポジウムも大阪大学(当時総長:鷲田清一)と共催しました。



会場風景: 中之島公園



ヤノベケンジ「ラッキードラゴン」

## 安養パブリックアートプロジェクト(APAP) | 2005

「安養パブリックアートプロジェクト」(主催:安養文化芸術財団)は、韓国・安養市で2005年に始まった国際的なパブリックアートプロジェクトで、数年ごとに開催されています。その第1回に北川フラムがコミッショナーとして招かれ、アートフロントギャラリーが制作・コーディネートを担当しました(芸術監督:イ・ヨン Chol)。都市の河川や公園、公共空間を舞台に、国内外のアーティストや建築家が彫刻やインスタレーション、パヴリオンなど約50点の作品を設置。人が訪れなくなっていた観光地を、歴史・文化・芸術が共存する「安養芸術公園」として生まれ変わらせるとともに、市民が日常の中でアートと出会う場を創出し、都市再生とパブリックアートを結びつけた韓国における先駆的な事例となりました。



イエッペ・ハイン「3-dimensional mirror Labyrinth」

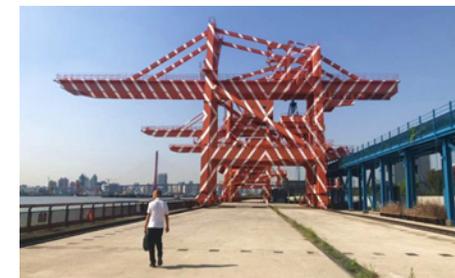


隈研吾「Paper Snake」

## 上海都市空間芸術季(SUSAS) | 2019

2016年に始まった上海・浦東の金融街・陸家嘴におけるパブリックアート事業に北川フラムがアートディレクターとして参画、アートフロントギャラリーが企画・制作を担当し、都市開発と文化を結ぶ試みとして実施されました。

2019年には、上海都市空間芸術季に参画します。上海市人民政府の主導で2015年に始まり、アート、建築、都市計画、デザインを横断する展示やプロジェクトを通じて、ウォーターフロントの再生と公共空間の新たな可能性を探ることを目的とした都市型芸術祭です。黄浦江沿岸エリアのかつての工業地帯や港湾施設、倉庫、造船所、発電所などの遊休施設を会場に、地域型芸術祭の手法が取り入れられ、サイトスペシフィックなアートが展開され、住民参加のワークショップも行われました。



フェリチェ・ヴァリーニ「Set of diagonals for cranes」(SUSAS)



浅井裕介「都市の野生」(SUSAS)

2000年に新潟県・越後妻有地域で始まった「大地の芸術祭」を皮切りに、芸術祭やアートプロジェクトを通じて、私たちは全国各地でアートによる地域づくりに取り組んでまいりました。アートには、地域の魅力を発見し、資源を活かしながら、地域・世代・ジャンルを超えた人々との協働、地域を世界へ発信する力があります。

### 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ|2000~

平成の大合併に向けた新潟県による広域活性化政策「ニューにいがた里創プラン」に基づき、過疎高齢化が進む十日町広域（現・十日町市、津南町）で「越後妻有アートネックレス整備構想」が1998年にスタートしました。これはアートにより地域の資源を掘り起こし、その魅力を高め、自律への道筋を築いていこうというものです。その一事業として「大地の芸術祭」は2000年に始まり、四半世紀を越えました。

地球環境時代、文明の曲がり角にある今こそ、1500年にわたって農業を通して大地と関わってきた越後妻有の里山に着目し、「人間は自然に内包される」という基本理念のもと、田んぼや空き家、廃校など、地域のさまざまな場所を舞台に、760km<sup>2</sup>という広い地域に、世界のアーティストが作品を展開。現在では200点以上の恒久作品が点在してい

ます。訪れた人たちは、作品を道しるべに地域をめぐるなかで、集落の文化や営みを知り、地域の人々と交流していきます。アーティスト、地域住民、サポーターが協働する「大地の芸術祭」は、アートを通じた地域再生のモデルとして国内外で高く評価されています。

近年は3年ごとの芸術祭の期間に限らず、豪雪に見舞われる冬のシーズンも含め、生活芸術としての食の展開や企画展の開催など多面的な活動により、通年での地域への誘客にも注力しています。総合ディレクター北川フラムのもと、アートフロントギャラリーはその企画・制作・運営・広報などに、NPO法人越後妻有里山協働機構とともに総合的に携わっています。2027年、第10回展が予定されています。



左から：イリヤ&エミリア・カバコフ「棚田」photo by Osamu Nakamura、磯辺行久「川はどこへいった」photo by Osamu Nakamura、内海昭子「たくさんの失われた窓のために」

### 瀬戸内国際芸術祭|2010~

2010年より瀬戸内海の島々を舞台に3年ごとに開催される「瀬戸内国際芸術祭」。香川県と、直島を拠点にアートによる地域再生に取り組む福武財団を中心に実行委員会を結成、北川フラムが総合ディレクターに迎えられ、過疎高齢化、環境汚染、産業の衰退、ハンセン病患者の隔離などの課題を抱える地域を「海の復権」を掲げ、芸術祭の手法によって再生させる取り組みが続いています。アートフロントギャラリーは企画・制作に携わり、NPO法人瀬戸内こえびネットワークとともに活動しています。芸術祭の運営には、国内だけでなく海外からも多くのサポーターが「こえび隊」として活動しています。

作品を目指し、島々を巡り、その土地の歴史や文化を知り、人々と交流できる「旅」の体験は多くの人を引き付け、会期中100万人を超える人々が訪れる世界最大級の芸術祭となりました。休校となっていた小中学校が再開し、移住者が増えた島も現れ、国立ハンセン病療養所のある大島との交流やアジア各地域とのネットワークが生まれるなど、大きな変化が起こっています。近年は沿岸部も参画、2025年には全17エリアに広がり、地域の産業や課題と向き合う動きも始まりました。



大巻伸嗣「Liminal Air -core-」photo Osamu Nakamura



木村崇人「カモメの駐車場」photo Osamu Nakamura



ワン・ウエンチー「抱擁・小豆島」



男木島小中学校再開(2014)

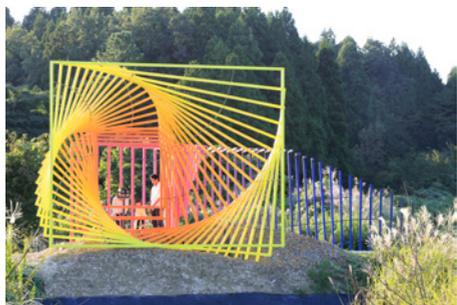
## 奥能登国際芸術祭 | 2017~

能登半島の最先端にある珠洲市全域を舞台に、「<sup>さいはて</sup>最涯の芸術祭、美術の最先端」と銘打ち、2017年に始まった「奥能登国際芸術祭」。古くから大陸とつながり、里海と里山に恵まれ、独特の祭りや風習、伝統文化を育ててきた地域の魅力をアートを通して発信し、多くの人を訪れました。2024年元旦、

能登半島地震が発生し、第4回の開催は見送られました。奥能登国際芸術祭 (Being) として、芸術祭で育まれたつながりや価値観を礎に、芸術文化を通じた地域づくりが続いています。



塩田千春「時を運ぶ船」



トビアス・レーベルガー「Something Else is Possible / なにか他にできる」photo Keizo Kioku

## 北アルプス国際芸術祭 | 2017~

北アルプスの麓、長野県大町市で「水・木・土・空 ~ 土地は気配であり透明度であり重さなのだ~」をコンセプトに、2017年にスタートした「北アルプス国際芸術祭」。アートを通して、「山岳文化都市」の

自然と風土、人々の暮らしをつなぎ、地域の魅力を再発見し、新たな交流と地域活性化を目指して開催されてきました。次回は2029年に予定されています。



目 [mé] 「Tangible Landscape」 photo by Tsuyoshi Hongo



ケイトリン・RC・ブラウン&ウェイン・ギャレット「ささやきは嵐の目のなかに」 photo by Tsuyoshi Hongo

## 下呂 Art Discovery 2026

日本三名泉のひとつ、年間190万人が訪れる下呂温泉で有名な岐阜県下呂市。一方で過疎高齢化が進み、市全体の活性化が望まれています。2024年「南飛騨 Art Discovery」が開催され、2026年、エリアを拡大し「下呂 Art Discovery」が新たに始まります。日本最深部の森、温泉、匠の技、街道に光を当てるとともに、廃校を舞台とした「みんなの学校」プロジェクトを実施。公募で選ばれた「こんな学

校あったらいいな」という夢を実現します。



## 房総国際芸術祭 アート×ミックス 2027

首都圏近郊都市・千葉県市原市で、地域課題の解決や交流人口拡大を目的として、小湊鉄道沿線を中心に2014年、「いちほらアート×ミックス」が始まり、3回の開催を経て、2024年には、千葉県誕生150周年記念「百年後芸術祭～環境と欲望～内房総アートフェス」が内房総5市において官民協働により開催されました。2027年には、千葉県、市原市、木更津市、大多喜町が連携し「房総国際芸術祭 アート×ミックス」として新たなスタートを切ります。



レオニート・チシコフ「7つの月を探す旅 第二の駅(村上氏の最後の飛行 あるいは月行きの列車を待ちながら)」(いちほらアート×ミックス2020+) photo Osamu Nakamura

## 芸術在樵山—広東南海大地の芸術祭 | 2022~

中国において、都市と農村の格差は大きな社会課題です。「大地の芸術祭」の思想に共鳴し、日中交流拠点「華園(中国ハウス)」を越後妻有に設立し、プロジェクトの企画や中国作家の架け橋となってきたHUBART(瀚和文化)代表・孫倩が仕掛け人となり、広東省佛山市南海区で2022年より隔年で中国版「大地の芸術祭」が開催されています。古い集落や農村景観、宗教文化など豊かな地域資源が残る地区で、住民参加や地域との協働のもと、国内外のアーティストが風土や暮らしに向き合いな

がら作品を制作。新たな文化交流と地域活性化を生み出す試みとして位置づけられています。



ウー・ケンアン「Day Line - The Diligent Sun」 photo Shimakage Studio

## 水俣

日本における公害問題の原点の地ともいわれる水俣。熊本・水俣との縁は半世紀近くに及び、「ガウディ展」（映画上映と講演会）、「子どものための版画展」、「アパルトヘイト<sup>アパルトヘイト</sup>！国際美術展」も巡回しました。

## シンポジウム「<表現に力ありや>全展開 映画『水俣の図』 | 1981

水俣病発生から25年がたった1981年、丸木位里・俊夫妻の「水俣の図」制作の過程を記録した土本典昭監督の映画とシンポジウムが、池袋西武百貨店の「スタジオ200」で9日間にわたって開催されました。青林舎の提案に基づき、北川フラムが企画、多様な分野の18人の方々に出席いただき、水俣病とその闘争について、絵画（丸木夫妻）、音楽（武満徹）、言葉（石牟礼道子）、映画（土本典昭）それぞれの表現とその合体の可能性についてなど、記録、ルポルタージュとしての表現の今日的意味と可能性について、さまざまな議論が行われました。

その記録は、『私ではなく、不知火の海が<表現に力ありや>全展開 映画「水俣の図・物語」』として現代企画室より出版されています。

登壇者：石牟礼道子、井上ひさし、色川大吉、鎌田慧、最首悟、佐多稲子、佐藤忠男、澤地久枝、高木俊太郎、武満徹、土本典昭、原広司、針生一郎、丸木位里、丸木俊、山下菊二、山田宗陸、吉田喜重／司会：北川フラム



『私ではなく、不知火の海が<表現に力ありや>全展開映画「水俣の図・物語」』（現代企画室・1981年）

## 「MINAMATA アートミーティング2013—世界に届け、わたしの水俣」| 2013

2013年、水銀の採掘・使用・排出などを国際的に規制することを目指す「水銀に関する水俣条約外交会議」が熊本市、水俣市で開催され、そのサブイベントとして「MINAMATA アートミーティング」が催されました。水俣病患者や支援者などで構成される「本願の会」が主催、地元有志による MAM 企画室が企画・運営を担いました。山あいの廃校ではインゴ・ギュンターによる《ワールド・プロセッサー》の展示、海辺の親水公園では、不知火海に浮かぶ打瀬船の帆をスクリーンにした土本典昭監督の「海とお月さまたち」の上映、北川フラムの司会による、水俣病患者で漁師の緒方正人とギュンターとの対談、満天の星空の下、5隻の打瀬船が静かに帆を

あげて進む中、おおか静流と藤本隆行による歌と光のパフォーマンス「私ではなく、不知火の海」が行われ、水俣の記憶と未来を静かに照らし出しました。



おおか静流と藤本隆行による歌と光のパフォーマンス「私ではなく、不知火の海が」

## 大島

日本国内に13ある国立ハンセン病療養所のうち、唯一の離島にある大島青松園。瀬戸内国際芸術祭を構想するにあたり、大島は芸術祭の核心のひとつとして位置づけられました。1909年に大島のハンセン病療養所ができて以来、長いあいだ瀬戸内海の孤島に隔離され差別と偏見のなか、自分の名前も仮名で、ふるさとも帰れず生き抜いた人々が暮らす大島。その100年を畏敬し、思いをいたさなければ、芸術祭はあり得ないと考えたからです。

2007年、病院プロジェクトに取り組み、大地の芸術祭にも参加した高橋伸之が主宰する「やさしい美術プロジェクト」に声をかけ、名古屋造形大学の学生や芸術祭のサポーター「こえび隊」がハンセン病回復者たちが暮らす施設に住み込み、足しげく通い、入所者との交流が始まりました。2010年の第1回芸術祭ではカフェ・シヨルとギャラリーが開設され、カフェでは入所者の記憶を再現したお菓子「ろっぽう焼き」が供されました。島外と隔絶されていた大島に人々が訪れることができるようになり、2016年には、大島と高松をつなぐ定期航路が開通しました。

瀬戸内国際芸術祭では、子どもを持つことを許されなかった入所者の「記憶・記録を残し後世に伝えたい」「自分たちがいなくなった後も人が通う、子どもたちが遊びに来るような場所であってほしい」という思いを受けて、アート作品の制作の他、こえび隊を中心とした納骨堂や解剖台を巡るツアーのガイド、子どもサマーキャンプの開催、「大島アワー」という園内放送ラジオや「大島レター」の発行など、関係者のネットワークの構築に努めてきました。

かつては700人を超える入所者がいた大島は、2025年時点で29人、平均年齢は87歳を超えています。

2025年、高松市が大島青松園と島全体の将来のあり方を検討するために「大島を未来へつなぐ会」を発足させたことは、1996年のらい予防法廃止後に将来構想を策定できなかった大島にとって画期的なことでした。



やさしい美術プロジェクト  
「つなぐの家」GALLERY15「海のこだま」 photo Yasushi Ichikawa



田島征三『Nさんの人生・大島七十年』—木製便器の部屋—  
photo Keizo Kioku

## 豊島

水と自然が“豊かな島”、豊島。しかし1970年代から都市の有害産業廃棄物が大量に不法投棄され、廃棄物の撤去と環境再生を訴える住民の運動が長く行われてきました。豊島もまた、瀬戸内国際芸術祭にとって核となる島のひとつです。この島の古民家を改修し、アートと食で人と人をつなぐ大きな屋根に囲まれたレストランとして再生したのが「島キッチン」です。東京のホテルのシェフやサポーターが協力して、島のお母さん達が島のお米、魚、野菜など、豊かな食材を使ったメニューを提供しています。島キッチンのテラスでは、毎月「島のお誕生会」がこえび隊の主導で開催され、パフォーマンスやワークショップも行われ、島民と来島者の交流となっています。



「島キッチン」(設計: 安部良) photo Osamu Nakamura



「島のお誕生会」

## 飯館村

東日本大震災のあと、大地の芸術祭では被災地の子どもたちを林間学校に招待し、瀬戸内国際芸術祭は総会でその支援を決議し、石巻に駆けつけ、能登半島地震では、珠洲の人たちを瀬戸芸に招待するなど、各地の芸術祭は被災地と関わりをもっています。飯館村は阿武隈高地の山中にある、「日本一美しい村連合」にも登録された自然環境と共に生きる里山です。2011年の福島第一原子力発電所事故により全村避難となりました。それをきっかけに、自然と人間の共生関係を再考する場として多くの人々が飯館村に関心を寄せ、この地のなりたちと現在を知り、未来に向けた取り組みが続けられ、アーティストや建築家たちも関わり始めています。

2021年からは、地域プロデュースを手掛ける株式

会社 MARBLiNG が、元ホームセンター建屋の改修を始め、「図図倉庫(ズットソーコ)」としてオープン。飯館村の発信とともに人々のつながりの再生を目指した公共スペースとして運用しています。こうした飯館村のあゆみに、アートの力をかりて、伴走したいと思います。



図図倉庫

## 奥能登「ヤッサープロジェクト」

2024年1月1日、能登半島地震により奥能登地域は壊滅的な被害を受けました。珠洲市では、奥能登国際芸術祭が2017年より3度にわたって開催され、多くのアーティストや来訪者がこの地域と関わってきました。震災の後、珠洲のことを気にかける「何かできないだろうか」という声が各地から寄せられました。そうした思いを受けて立ち上がったのが「奥能登ヤッサープロジェクト」です。「ヤッサー」は祭りの掛け声で、弥栄(いやさか)を意味します。人と人とのつながりを編み直し、文化・芸術によって地

域の未来をつくっていくことを目指しています。これまで、寄付や助成によって資金を集め、芸術祭作品の修復や維持管理を行い、2025年には空き店舗を改修し、震災後の珠洲で起きている出来事や暮らしの記録を残し、未来へ手渡す「スズレコードセンター」が設立されました。アーティスト・イン・レジデンスの拠点施設の整備も進んでいます。ワークショップや復興ツアーなどを通して、地域の人と外から訪れる人が関わる入口をつくっていきます。



震災の被害状況



スズ・シアターミュージアム(キュレーション: 南条嘉毅) photo Keizo Kikaku  
大きな被害を受けたが、修復された。



潮騒レストラン photo Hiroyuki Hirai  
設計の坂茂氏は、復興住宅の建設にも携わった。



スズレコードセンター(ディレクター: 甲斐賢治) photo Kazusa Saikai

スペインの芸術家、ジョアン・ミロは「私の作品のすべては、ガウディに負っている。幼い頃遊んだグエル公園での記憶が、私の美術の源なのだ」と語っています。私たちがまちづくりや様々なプロジェクトで道筋が見えなくなったとき、いつも思い返すのは「やがてミロとなる一人の子どものために」ということです。精神が柔軟な時代に本当によいものを見、素晴らしい空間を体験することは、その後の人生に決定的な影響を与えるはずで。 「アパルトヘイト否!国際美術展」も、「ファーレ立川」も、芸術祭も、そうした思いのもとに取り組みられてきました。

## 子どものための版画展 | 1980~1982

子どもたちと現代美術がナマに接する機会をつくりたい。「子どものための版画展」は1980年から3年にわたり、全国の小中学校、高校80校で開催されました。日本の近現代美術を代表する40人の作家による版画40点を、教室や廊下、体育館など子どもたちにとって日常の場に展示。多様な技法があり、複数性による入手がたやすく、親しみやすい版画の特質を活かしたこの移動展覧会は、各地の

学校、教育委員会や文化団体との協働によって実現し、それぞれの地域で大きな反響を呼びました。



## 越後松之山「森の学校」キョロロ | 2003~

第2回の大地の芸術祭で誕生した「森の学校キョロロ」は、多様な生き物が生息する松之山エリアの里山を背景に構想されました。「等身大の科学」を提唱する宇宙物理学者・池内了氏を顧問に、「住民全員が科学者」というコンセプトのもと、ジュニアインストラクターの養成、博士号をもった学芸員に

よる自然体験プログラムなどが組まれました。建築にもその方針を反映させるため、設計者を無資格無制限コンペ（審査員：青木淳、小嶋一浩、妹島和世）を実施、手塚貴晴・由比が選ばれました。現在は、生物多様性をテーマとした自然観察プログラムや展覧会が実施されています。



photo Takao Hashimoto



photo Osamu Nakamura

## 越後妻有の林間学校 | 2011~

2004年新潟県中越地震で被災した子どもたちに向けて行われた「明日へのフォーラム」の流れを受け、2007年、「越後妻有こどもサマーキャンプ」が始まりました。農業に深く関わりながら生活してきた越後妻有の人びとの知恵と里山の自然を教材に、第一線で活躍するアーティストや専門家を先生に迎え、子どもたちの学び、遊び、生きる力をはぐくむプログラムが組まれました。2011年、東日本大震災を機に、「サマーキャンプ」は「越後妻有の林間学校」へと展開し、被災した東北の子どもたちが越後妻有に来て、アーティストとのワークショップを楽しみながら、草刈りや稲刈りなどの地域のお手伝いや交流をする総合的な活動に発展しました。普段は決して交わることのない、

中山間地のじさま、ばさま、アーティストや学生、地域内外の子どもたちが同じ時間を共有し、お互いから学びを得られる機会を生み出しています。

現在も「越後妻有の林間学校」は継続しており、地域行事への参加、地元講師とともにイノシシの解体処理を行うプログラムなど、さらに幅広いコンテンツで越後妻有地域に関わる内容を展開しています。元々は集落の子どもたちが小正月に行っていた「鳥追い」（害鳥を追い払い豊作を祈願する鳥追い歌を歌いながら集落内を練り歩く伝統行事）を、林間学校でやってくる子どもたちが代わりに行うことで集落の伝統行事を継承しているエリアもあります。



photo Osamu Nakamura



ワークショップをする田島征三



鳥追い

## 奴奈川キャンパス | 2015~

2014年に廃校となった旧奴奈川小学校を、大地の芸術祭施設として主要5科目以外の体育、音楽、家庭科、美術などを通して、地域の価値を実践的に学ぶ場としてオープン。デジタル・情報化が進むなかで、2024年には未来を担う子どもたちが自らの身体を通して土や木などのリアルな素材と触れ合う機会を提供する場を目指し、「子ども五感体験美術館」として館内作品を大幅にリニューアルしました。「見る」だけでなく、聴覚、触覚といった五感で楽しむことができる芸術祭作品の展開をアーティストとともに検討し続けています。超絶技巧とも言えるアーティストの仕事ぶりや、素材の扱い方をワークショップを通して体験できます。

また、奴奈川キャンパスは、芸術祭のネットワークにより誕生した女子サッカー実業団チーム「FC 越後妻有」の拠点でもあります。従事者が減少する農業の課題とセカンドキャリアが形成しにくい女子サッカー業界の課題の解決を目指す本プロジェクトに選手たちは、サッカーと農業を両立させながら、芸術祭の運営。地域向けの体操教室の開催などスポーツという切り口から新しい地域との関わりを生み出しています。



FC 越後妻有 photo Osamu Nakamura



奴奈川キャンパス photo Osamu Nakamura



関口光太郎「除雪式奴奈川姫」



鞍掛純一+日本大学芸術学部彫刻コース有志「木湯」  
photo Rintaro Kanemoto

## 協働する美術

### Collaborative Art

## 「こへび隊」から「こえび隊」へ

「大地の芸術祭」のはじめ、地域住民の間には「なぜアートなのか」「何の役に立つのか」という戸惑いや反対がありました。その状況を変えていく大きな力になったのが、サポーター組織「こへび隊」でした。「こへび隊」という名称は、脱皮しながら成長するへびにあやかっただけのもの。大学生を中心とした「こへび隊」は作品制作の手伝いだけでなく、農作業や雪堀り、空家の掃除、祭りの準備など、地域の暮らしに寄り添って働き、住民と同じ作業をし、同じ食卓を囲み、時間を共にするなかで、少しずつ信頼関係を育んでいきました。

2004年、中越大地震が発生すると、被災地支援「大地の手伝い」が始まり、大人たちが「こへび隊」として関わるようになりました。

2006年からは香港の大学生たちが香港の財団などの支援を受けて、「こへび隊」として活動するよう

になり、台湾、中国、ヨーロッパなど海外からの参加も増えていきました。このように、「地域・世代・ジャンルを超えた協働」が生まれていったのです。

「こへび隊」の精神と経験は、2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭の「こえび隊」に引き継がれていきます。「こえび隊」は、会期100日だけでなく、それ以外の1000日間、島の草刈りや運動会に参加し、大島の人々に寄り添い、豊島では「島のお誕生会」を行い、お弁当のデリバリーをするなど、島のさまざまな活動に参加しています。また、今では、その3分の1が海外からの参加者です。

越後妻有、瀬戸内と続く芸術祭のサポーターの輪は、さらに市原、大町、珠洲、そして海を越えて広がっています。



こへび隊



こえび隊



美術とは、いわゆる絵画や彫刻に限りません。美術は美術館の内部に閉じたものではなく、人々の暮らしや共有体験の中から生まれます。人がつくったアーティフィシャルなものと自然とのさまざまな関係性こそが「美術」であり、人間がつくってきたものはすべて「美術」なのです。パフォーマンス、祭り、音（楽）、庭、食…。さまざまな要素が未分化の「生活芸術」が展開されています。

### 冬プログラムと雪見御膳

越後妻有は日本有数の豪雪地です。この雪をどう楽しむか。2008年より越後妻有では冬のアートを始めました。さまざまなアーティストが雪の特質を活かした活動を行い、雪国の暮らしを体験するプログラムも組まれてきました。

「雪見御膳」は、長く厳しい冬、雪に閉ざされた中で、人々がどのように食べ、集まり、冬を越えてきたのかを体験してもらうために2014年から始まりました。冠婚葬祭などでふるまわれた、越後妻有の歴史や

文化が凝縮した御膳は、時代とともに失われてきています。出番が少なくなった漆塗りの器に越冬の郷土料理を盛り付け、各集落で、お母さんたちが自慢の料理とともにお客様をおもてなしする、まさに「生活芸術」の復権と言えます。この地域の食は、お母さんたちが守ってきた文化です。地域の人がつくる料理を囲むことで、その土地の時間や暮らし、文化が見えてくるのです。



雪アート・新潟ユニット「大蛇の降臨」



高橋匡太「Gift for Frozen Village」 photo Osamu Nakamura



「雪見御膳」でのおもてなし photo Osamu Nakamura



「雪見御膳」 photo Ayumi Yanagi

### うぶすなの家 | 2006~

地域の食の恵みとそこで働く集落の人びと自体が作品となったと言えるのが「うぶすなの家」です。2004年の中越大地震で半壊し空家となった茅葺民家を、レストランのあるやきものギャラリーとして2006年の大地の芸術祭でオープンしました。ディレクションは陶芸誌『陶磁郎』編集長・入澤美時氏、改修は古民家再生の専門家、建築家・安藤邦廣



photo Shigemitsu Ebie

氏に依頼しました。日本を代表する陶芸家たちがつくりあげたいろり（妻有焼）、かまど（美濃焼）、洗面台（益子焼）、風呂（信楽焼）が設えられ、地元の食材を使った料理を陶芸家の器でもてなすレストランは地域の女衆の澆刺とした笑顔とおしゃべりとともに人気を集めています。現在は宿泊施設としても営業しています。



photo Osamu Nakamura

### 越後妻有「上郷クローブ座」 | 2015~

「越後妻有『上郷クローブ座』」は、廃校となった中学校を改修して生まれた施設です。シェイクスピアの「クローブ座」と、津南の食文化を象徴するスパイス「クローブ」を掛け合わせた名称で、「食・演劇・地域の暮らし」が一体となった場となることを目指しています。美術作品だけでなく、身体的・時間的な芸術（演劇・音楽・パフォーマンス）を地域で展開する拠点として、体育館を仮設劇場として活用し、アーティストの滞在制作や稽古、上演の場として構想さ

れました。子どもたちの演劇から海外のアーティストの公演まで、幅広いプログラムが上演されています。「上郷クローブ座レストラン」は地元の女性たちが地元の食材を活かした料理を作り、演劇仕立てで提供する「パフォーマンス型レストラン」です。食をテーマに作品を展開するEAT&ART TAROのプロデュースでスタート。作品を見るだけでなく、食べたり、話したり、演じたりすることで、人が地域と関わることのできる、唯一無二のレストランとなっています。



レストランでパフォーマンスする女性たち（脚本・演出：原倫太郎+原游「秋山紀行」） photo Osamu Nakamura



シアターでパフォーマンスする子どもたち（越智良江作・演出「あしたのあしあととあしあととあしあと」） photo Osamu Nakamura

## 大地の運動会 | 2024~

「運動会」は、地域が総出で参加して競い合い楽しむ「お祭り」で、外国にはない日本独特の文化です。団体競技や応援合戦、競技や合間の音楽、華やかな応援旗、観客席全体がピクニック会場になるお弁当タイム……。それは体育だけでなく、音楽、美術、家庭科などの要素を含んだ総合芸術でもあります。

2001年、立川国際芸術祭のオープニングプログラムとして昭和記念公園で開催された「アートピクニック」は、かつて米軍基地があり、外国人が多く住む立川で「世界の人々と友だちになろう」というコンセプトを掲げて開催された運動会です。市内6地区に大陸別チームを編成し、2000人近い人々の参加を得て実行されました。9.11から1か月後のことでした。いつかこの「アートピクニック」を越後妻有、そして他の地域でも開催したいと願い、実現したのが、「大地の運動会」です。

「大地の運動会」は、2024年、第9回「大地の芸術祭」の公式イベントとして、アーティストや各分野の専門家も関わり、24の国と地域から約500人が参加して開催されました。（実行委員長：為末大）地域の人たちだけでなく日本に住む外国人、難民や

仮放免者、経済的に厳しい家庭の子どもたち、障がいをもつ人たち、企業、教育機関など様々な背景を持つ人が集まり一緒に楽しむ「ここでしか体験できない運動会」。それは、四半世紀におよぶ「大地の芸術祭」の大きな成果でもありました。

運動会は翌年にも開催され、2025年度の独立行政法人国際交流基金・地球市民賞を受賞しました。その受賞理由には、「在住の外国人を含む多様な人々が同じチームで競技し、応援し、食事を共にし、互いの息づかいを分かち合う時間は、共に生きる感覚を身体で実感できる特別な体験であり総合芸術活動である。笑い声と声援が交差する共生社会の祝祭として『大地の運動会』を高く評価する」とありました。



立川国際芸術祭「アートピクニック」



「大地の運動会」フィナーレ photo Osamu Nakamura



「大地の運動会」 photo Osamu Nakamura

## アケヤマー秋山郷立大赤沢小学校 | 2024~

かつて義務教育就学免除地域に指定された秋山郷で、子どもたちに教育を受けさせたいという地域の願いから、私設学校として大正13年に開設された大赤沢小学校。2021年に閉校したこの学校は、2024年、「アケヤマー秋山郷立大赤沢小学校」として生まれ変わりました。「人間が生きるために必



アケヤマー秋山郷立大赤沢小学校 photo Rintaro Kanemoto

要な術を山から学ぶための新しい学校」をコンセプトに、アーティスト、住民、研究者とともに探究し、学び、語り合い、資料や作品を展示・共有していく継続的な場として活動しています。

監修：深澤孝史 会場構成：一般社団法人コログロウ/佐藤研吾



井上唯「ヤマノクチ」 photo Keizo Kioku

## みんなの学校 | 2026

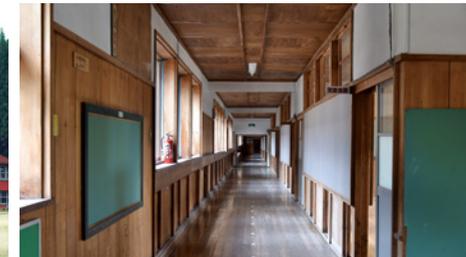
少子化が進み、現在全国で毎年平均して約450校が廃校になっているとされています。一方で、現在の教育制度において、学校はさまざまな課題を抱えています。「下呂 Art Discovery 2026」では、1954年に建てられた旧湯屋小学校を舞台に、授業、給食、休み時間、校内放送といった日常の学校生活から、入学式、運動会、卒業式などの年間行事など、みんなの小学校の記憶を形にするアートプロジェクト「みんなの学校」を実施します。公募に

はアーティストだけでなく、「こんな学校あったらいいな」を実現したい250を超える個人・グループから応募があり、60を超えるグループによるプログラムが実現します。

地域の拠り所であった学校は、人びとの心の灯であり、最後の砦の一つです。「みんなの学校」は、みんなの心にある学校を蘇らせ、夢の学校をつくるプロジェクトです。



「みんなの学校」プロジェクトの会場となる旧湯屋小学校



編集・発行：株式会社アートフロントギャラリー  
編集協力：NPO法人越後妻有里山協働機構  
デザイン：北風総貴(ヤング荘)  
発行日：2026年3月18日